

デジタル時代の多読活動における
英語教育効果と実践的検証
——学習者への多面的影響とデジタルリソースの活用戦略——

大 崎 美 佳

Educational Effects and Practical Examination of
Extensive Reading in the Digital Age:
Multifaceted Impacts on Learners and Strategies for
Digital Resource Utilization

OSAKI Mika

Abstract

This text outlines a research approach to analyzing the characteristics and benefits of extensive reading using a digital library, with a focus on learner needs. The analysis is multi-faceted, incorporating both quantitative and qualitative data. Key methods include administering level-based vocabulary tests and conducting surveys to assess changes in learners' mental attitudes toward reading. Additionally, individual student reading activity logs will be examined to explore correlations from various perspectives. The research will analyze and evaluate factors such as changes in test duration, individual test scores, reading speed, reading volume, and mental shifts, with the goal of identifying effective ways to utilize the digital library for extensive reading. Furthermore, the study will investigate changes brought about by modifying reading activities and will compare the results to traditional methods. The ultimate aim is to highlight how digital library-based extensive reading differs from conventional approaches and to provide insights for future learning support strategies.

キーワード：多読, デジタル, モチベーション, 学習支援, 探求サイクル

1. は じ め に

英語力を高めるための方法の一つに多読法がある。多読法とは、辞書を使わずに推測しながら大量に計画的に読むことで読解力と素早く読む力をつける方法である。

コロナ禍において、大学でもオンライン授業が展開されるようになり、それとともに、デジタルライブラリーを導入した多読活動も広がってきた。筆者の大学では、2022年度からX-Reading というデジタルライブラリーを全学共通教育科目である「基礎英語」の授業の一つの柱として位置づけることになり、その成果を詳しく検証し可視化することにより、学習者の英語教育においてどれほどのメリットがあるのかを明らかにする必要性が生まれた。そこで、本研究では、学習者の英語力を高めるために、より良い環境を整えることを目指す。

まず、X-Reading 活用の意義を明らかにするとともに、X-Reading を使った多読法の特徴や利点を理解する。さらに、学習者のメンタル面への影響や学習者が感じる X-Reading 活用の需要にも焦点を当てることで、その効果を多面的に分析し、今後のより効果的な活用方法に活かす。以上を本研究の目的とする。

検証方法は、レベル別語彙テストとリーディングに対するメンタル面の変化を見る質問調査の両方からデータ分析を行い、さらに学生個々の多読活動記録を精査することで、様々な視点からその相関関係を考察する。テスト所要時間の変化、学生個々のテストスコア、リーディングスピード、読書量、メンタル面の変化などを含めて分析、評価し、効果的な活用法を模索する。また、研究における分析と考察にともない、多読活動方法に工夫を加えることで起こる変化も検証しながら、デジタルライブラリーによる多読法が従来の方法と比較して、どのような違いをもたらすのかを明らかにすることで、これからの学修支援の方向性に示唆を与えることを試みる。

まず初めに、多読法と大学での多読活動への取り組みについて考察し、次に、学生のレベル別語彙テストの結果から多読による語彙力、英語力への影響を検証する。さらに、多読によるメンタル面の変化を調査し、多読活動の効果を分析、考察を行い、そこから改善点を見つけ、より効果的な多読活動のための授業方策を探索する。その研究過程をとおして、デジタル時代における効果的な多読活動の可能性に繋げていく。

2. 多読法の活用とその取り組み

前後期の学期初めと後期学期末の年3回、日英バイリンガル用レベル別語彙テストを学生が受け、その結果を2年間記録し分析する。

また、テスト取り組み時間の変化や、X-Reading における学生個々の多読活動記録とも照らし合わせて、様々な視点からその相関関係を調査する。

2.1 多読法と精読法

2.1.1 多読法と精読法の定義

多読法とは、言語能力向上を目的に、自分に読めるレベルの言語で書かれた文章を大量に計画的に読むことであり、自分で面白いと思える本を選び、辞書を使わずに推測しながら読むことで読解力と素早く読む力をつける方法である。英文読解に慣れるとともに、多くの英語表現に触れることで、コミュニケーション能力を身につけることを目的とする。

Day and Bamford (2002) は多読の10の原則を以下のように示した。

1. The reading material is easy.
2. A variety of reading material on a wide range of topics is available.
3. Learners choose what they want to read.
4. Learners read as much as possible.
5. The purpose of reading is usually related to pleasure, information and general understanding.
6. Reading is its own reward.
7. Reading speed is usually faster rather than slower.
8. Reading is individual and silent.
9. Teachers orient and guide their students.
10. The teacher is a role model of a reader.

国際多読教育学会による多読指導ガイド (2011) によると、多読とは辞書なしでも十分に理解できるやさしい英語の本を楽しく、速く読むことである。

一方、多読法とは対照的に行われる読書法として精読法がある。精読法とは、一つの文章を丁寧に読み解くことでリーディング力を向上させる方法である。文の構成や文法、語彙等一つ一つを理解し、文章を正確に読み取ることを目的とする。

2.1.2 効果的な読書法

多読法と精読法では、英語力を高めるためにどちらが学習者にとって効果的なのか、またはどのように使い分けることが望まれるのだろうか。高瀬 (2010) は多読法と精読法を表1のようにまとめている。

多読には、ある程度の語彙力や文法力が必要であるため、一般的に精読による英語基礎能力を獲得した後に多読を行うことが望まれる。表1から読み取れる大きな違いは、精読法ではテキストの中の断片的な部分にフォーカスし、日本語訳をしながらの読解学習であるが、それに

表 1 精読（従来のリーディング）授業と多読授業の特徴

	精読（従来のリーディング）授業	多読授業
受講態度	受動的・消極的	能動的・積極的
テキスト選択	教師	学習者
教材・レベル	統一（教師が選択、全員同じ教材）	多様（学習者が各自の英語力・好みに応じて選択）
読書量	少量（中学高校6年間の標準テキストで約3万語）	大量（年間読書目標10～30万語以上、3年連続で50～100万語以上）
英語の内容	断片的・部分的（1回の授業に1～2パラグラフ）	全体把握・状況に即した内容（本1冊単位）
英語の難易度（構文・語彙）	高い（実際の英語力よりかなり高い）	低い（辞書を使用せずに楽に読める程度）
読むスピード	遅い	速い
辞書	多様	読書中は使わない
日本語訳	主に全訳	しない
内容理解	訳した日本語で	英語のままで
教師の役割	教える、説明・解説する、問題を解かせる	観察・図書選択指導、一緒に読む

出典：高瀬（2010）による表を一部修正

対して、多読法では全体把握を行うことが重要であり、日本語に訳さず英語の原文のままで読解をすることである。また、多読法の教材レベルは学習者の英語力や好みに応じて選択できることも注目すべき点だと言える。

本研究では、従来のリーディング方法である精読法ではなく、さらに進めた多読法によるリーディング方法について、その有効性を確認するとともに、効果的な多読法を探っていく。

英語母語話者が英語能力を高めていくための読書の勧めの中には、最適な本の選定方法として「5本指のルール」というものがある。米国テキサス州の小学校 Frank Moates Elementary School のホームページの Library のサイトには次のような本の選び方が記載されている。

How to pick a book using the five finger rule:

1. Open the book.
2. Begin to read.
3. Put one finger up for any word you do not know
4. At the end of two or three pages, if you have:

1 finger: This book is good for you if you understand the text.

2 fingers: This book is good for you if you understand the text.

3 fingers: This book may be too hard for you but could be a good choice if you understand

what you are reading

4 fingers: This book may be too hard for you. Choose only if you can understand what you are able to read.

5 fingers: Pick another book.

Scholastic のホームページの Parents のサイトにもよりシンプルな文言で記載されている。

0-1 fingers: It's too easy.

2-3 fingers: It's just right.

4-5 fingers: It's too hard (or best read aloud with a buddy).

研究対象の女子大学では初中級レベルの日本人女子大生にわかりやすいシンプルな方法として、「2本指のルール」を推奨している。

The two finger rule:

To find a good reading level, choose a book. Open to any page and read it. On your hand, count the number of new words.

0 new words = too easy

1~2 = This level is perfect!

3 or more = too difficult

2.2 語彙力における効果の検証

2.2.1 検証方法

本研究では、全学共通教育科目の基礎英語における授業課題として X-Reading というデジタルライブラリーを使った多読活動を始める前と始めた後に、学生が語彙テストを受け、その結果を分析した。テストには、Paul Nation (1993) により形成され、その後 McLean and Kramer (2015) により改訂された日英バイリンガル用レベル別語彙テストを使用した。これは、頻出語彙を基準としたレベル別語彙テストであり、初中級レベルの英語学習者の語彙力を測る目的で作られたテストである。頻度の高い6,000語のうち、何語知っているかを測定する Vocabulary Size Test であり、1,000語レベルの問題から6,000語レベルまで6段階に分かれ、それぞれのレベルから24問出題される。今回の検証では、授業内の限られた時間的な拘束があること、学生の英語力が初中級レベルであることから、国際英語学科はレベル5、他学科はレベル4までのテストで測定を行った。

調査対象は、全学1、2年生必修授業「基礎英語」の履修者の中から筆者が担当した国際英

語学科41名と他学科63名、計104名であった。

また、テスト実施日は、当初前期と後期の学期初めと終わりに合わせて全4回としていたが、後期初めの実施は行わないこととした。その理由として二つのことが挙げられる。まず一つ目の理由は、前期学期末7月から後期初めの間に夏休みが入ることで、継続的な多読活動が出来ない上に、英語に触れる機会がほとんどなくなる学生もいることが考えられるため、多読活動と語彙テストの関連性を調べる検証には時期的に適さないことだ。もう一つは、頻繁にテストを実施することにより、学生が問題の語彙を意識する可能性が高まり、検証結果の信憑性に疑問が起こる懸念が生じる。その結果、テスト実施日は前期の学期初めと終わり、後期の学期末の3回とした。

2.2.2 X-Reading の取り組みルール

2.1.1で述べたように、多読活動では学習者が自分のレベルに合わせて好きな本を選ぶことができる。重要なことは、難しすぎない適切なレベルの本を辞書を使わず推測しながら楽しく読み続けられることである。そこで、学生へは以下のルールに従って課題に取り組むように指示した。

- ・ レベル別の本から好きなものを選んで読む
- ・ レベル1の本から読み始める
- ・ 読書文字数1万語獲得まではレベル1～3の本に限る
- ・ 読書後はクイズに答え60%以上で合格となり、読んだ読書文字数が獲得できる
- ・ 獲得文字数学期目標最小基準：国際英語学科は2万語、他学科は1万語

獲得文字数学期目標最小基準値については、低い目標設定のようであるが、これは、「基礎英語」がリーディング主体のクラスではなく、多読活動はあくまで基礎力をつける課題の一つという位置づけに他ならないからである。他の課題や英語関連の他教科の課題とのバランスを鑑みて目標設定が成されている。

X-Reading では、グレイディッド・リーダーズ (graded readers) と呼ばれる図書から学生が自分で好きなものを選んで読み進める。国際多読教育学会 (Extensive Reading Foundation) によると、グレイディッド・リーダーズ (以下 GR とする。) は語学レベルに合わせて、少しずつ難易度が上がっていくように書かれており、出現頻度の少ない語彙は使わず、重要な語彙が頻繁に出てくるよう、出版社がコントロールして、英語学習を助けるものになっている。GR はレベル1～15まであり、レベル1は易しくレベル15は語彙や文法ともに難易度が高い内容となる。

学生は読書文字数1万語を獲得して初めてレベル4以上の本を読むことができる。これはま

ず多読開始時には易しい本から読み始めることで、楽しく読書に慣れ親しむという目的であり、学生の英語力の向上に合わせて GR のレベルも徐々に上げていく。また、この多読活動においては、細かいところまでの理解は求められていないが、大まかな内容理解ができて初めて読書文字数が獲得できる。理解度を測るための手段として、学生は読後に内容理解テストを受けなければならない。国際多読教育学会が主催する M-Reader というクイズサイトのテストが、X-Reading で学生が読む GR に呼応しており、60% 正解すると合格となり、読んだ本の文字数が獲得できる。

2.2.3 X-Reading 課題の取り組み

下の表 2 は国際英語学科 1 年生クラスからランダムに抽出した 4 人の学生の多読課題の学期末最終結果である。

表 2 X-Reading Class Summary (Record) の例

Student	Books Added	Books Passed	Words Read	Avg Xreading Level	Read Time (h:m:s)	Read Speed (Word/Min)	Quizzes Taken	Quizzes Passed	Quiz Avg
A	103	87	20,115	2	02:39:50	125.8	102	91	78.4
B	50	47	37,599	2	04:03:10	154.6	48	47	87.9
C	119	115	122,797	2	34:27:00	59.4	119	115	84.7
D	58	46	250,038	6	20:20:19	204.9	54	52	86.9

この表から一目でわかる特徴は、学生一人一人の課題への取り組み方、姿勢は大きく異なるということである。達成目標最小数値 2 万語という課題について、ある学生は 2 万語という数値をなんとか達成すればよいと考えているが、他の学生にとっての 2 万語という数値はただの通過点であり、できるだけたくさん獲得文字数を増やすことを目標に掲げて自主的に読み進めるなど、学生によりその取り組み方は様々であった。

また、Read Speed を見ると、1 分間に読む文字数はクラス平均 163.1 文字であったが、個々に見ると 59.4 文字であったり 204.9 文字であったり、読書スピードにはかなりの幅がある。

そこから考えられることは、授業で同じテキストを使ってリーディング活動を行う場合、同じ量の内容を読み終えるのには大きな時間差が生じてしまうということである。その結果、早く読み終えた学習者は他の学習者が読み終わるのを待たなければならず、遅い学習者はその間、ピア・プレッシャーを感じながら読むことになり、それが両者の自信喪失や学習意欲の減退につながる可能性を生み出している。授業内におけるリーディング活動では、差別化された指導 (Differentiation) を取り入れるなど、指導者は一層の工夫が求められるだろう。

2.3 まとめと考察

2章では、多読法と精読法の違いを明らかにすることで、各々を上手く組み合わせてリーディング活動を行い、より効果的な英語力を養うことができるということがわかってきた。まずは精読法により、1文ずつ英語を日本語に置き換えて丁寧に見ていくことで、基礎的な語彙や文法、文の構成を理解し学んでいく。その上で、多読法により辞書を使わず様々なテキストを楽しく素早く読んでいくことで、英文読解に慣れ、会話での表現力も身につけていく。これを組み合わせて行っていくことにより、さらに効果的な英語力を習得していけることが期待される。

本研究では、デジタルライブラリーを活用した多読活動が、学習者にとって語彙力、ひいては英語力向上のために、いかに効果的に実施されるのか、また有効であるのかを考察することが目的である。3章では、実際の効果を確認しさらに考察を深めていきたい。

3. 多読による語彙力の効果

精読法とは対照的な多読法は1917年に Harold Palmer により提唱された。その後、第二言語習得法の一つとして多読法はリーディング力、語彙力向上に効果があると先行研究を通して言われてきた。

本章では、本学の女子学生を研究対象として、多読法が語彙力向上にどれほどの効果を示すのかを調査しその結果を分析、考察する。

3.1 レベル別語彙テスト

3.1.1 レベル別語彙テストの結果

表3は、国際英語学科1年生、2年生と他学科1年生、各々のテストスコアの変化を表したものである。

テストは各レベル24点満点で、レベル1から5にいくほど難易度が高くなる。この結果から読み取れる学生の語彙力の変化を検証する。

国際英語学科1年生のレベル別語彙テストの結果は、学年平均スコアがどのレベルにおいても、多読活動を始める年初と比べ、約3か月後の学期末、10か月後の年度末と上昇し続けている。特に難易度の高いレベル5のテストにおいての上昇率は20.5%と高い。これは1レベル1,000語当たりに換算すると205個の新たな語彙を獲得したことになる。

国際英語学科2年生と他学科1年生のレベル別語彙テストの結果も合わせて見てみると、1年生はどの学科においても、年初から学期末、学年末へ向かい、全てのレベルにおいて平均スコアは上昇していることがわかる。2年生も1年を通してほぼ上昇していると言える。また国

表3-1 テストスコアと語彙力の変化（国際英語学科1年）

		① '22 5/6	② '22 7/26	③ '23 1/24	③ - ①	% gained	Words gained
Level 1	Average平均点	22.28	22.65	23	0.72	3.2	32
	Median 中央値	23	23	23			
	SD (σ)標準偏差	1.742397117	1.05718828	1.133893419			
Level 2	Average	18.5	20.24	20.67	2.17	11.7	117
	Median	18	20	21			
	SD (σ)	4.047511945	2.712986199	2.468853599			
Level 3	Average	15.44	15.88	16.87	1.43	9.3	93
	Median	15	16	17			
	SD (σ)	2.7912094	2.578759392	1.846489591			
Level 4	Average	14.33	15.59	16	1.67	11.7	117
	Median	14	16	16			
	SD (σ)	3.910769444	3.606570801	3.207134903			
Level 5	Average	14.22	16.88	17.13	2.91	20.5	205
	Median	14	17	18			
	SD (σ)	2.486565208	2.976624618	2.642149197			

表3-2 テストスコアと語彙力の変化（国際英語学科2年）

		① '22 4/29	② '22 7/26	③ '23 1/24	③ - ①	% gained	Words gained
Level 1	Average平均点	23	23	22.77	-0.23	-1.0	-10
	Median 中央値	24	23	23			
	SD (σ)標準偏差	1.272418021	1.303840481	1.797665634			
Level 2	Average	19.68	20.19	20.27	0.59	3.0	30
	Median	20	21	22			
	SD (σ)	3.605003111	3.56739622	3.881357374			
Level 3	Average	15.82	16.24	16.32	0.5	3.2	32
	Median	16	17	16			
	SD (σ)	3.5407339	3.42437086	3.137884693			
Level 4	Average	14.91	16.14	16.82	1.91	12.8	128
	Median	15	16	17			
	SD (σ)	3.490246149	3.424700195	3.289758475			
Level 5	Average	16.39	17.48	17.05	0.66	4.0	40
	Median	16	17	17			
	SD (σ)	3.313047628	2.56162151	3.301908146			

表3-3 テストスコアと語彙力の変化（他学科1年）

		① '22 6/2	② '22 7/28	③ '23 1/23	③ - ①	% gained	Words gained
Level 1	Average平均点	21.52	21.62	21.7	0.18	0.8	8
	Median 中央値	23	22	22			
	SD (σ)標準偏差	3.2798429	1.9191442	2.2630899			
Level 2	Average	19.34	19.98	20.35	1.01	5.2	52
	Median	20	21	20			
	SD (σ)	3.4110969	3.2713415	2.4798			
Level 3	Average	16.23	16.54	16.73	0.5	3.1	31
	Median	16	16	17			
	SD (σ)	4.6295661	3.8318262	4.2941608			
Level 4	Average	15.21	15.89	16.86	1.65	10.8	108
	Median	14	15	17			
	SD (σ)	4.879246	4.4732331	4.6527226			

国際英語学科と他学科の1年生については、特にレベルが高いテストほど語彙力が大幅に伸びていることが見とれ、多読活動を初めて行った1年生に効果が顕著に表れていることは興味深い結果である。このことから、語彙力向上に多読の影響が非常に高いのではないかと考えられる。この点について、他の視点からも考察し、明らかにしていきたい。

3.1.2 レベル別語彙テスト所要時間

国際英語学科では、テスト所要時間についても検証を行った。以下は国際英語学科1年生と2年生のテスト所要時間の変化を表すグラフである。最初にテストを終えた学生と最後に終えた学生のテスト所要時間を年初と年度末で比較検証する。

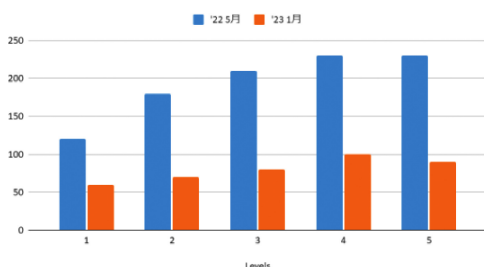


図1-1 1年生のテスト所要時間（最初の学生）

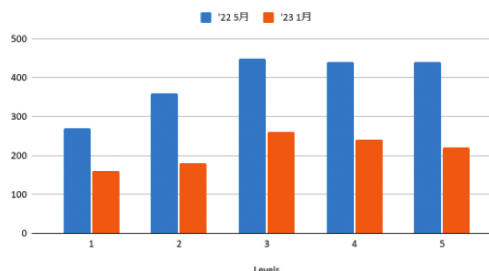


図1-2 1年生のテスト所要時間（最後の学生）

各々レベル1と5のテストの所要時間を見ると、最初にテストを終えた学生（図1-1）は、レベル1のテストを終えるのに年初は120秒かかっていたが、年度末には60秒という速さで終え、100%時間を短縮、実に2倍の速さでテストを終えたことがわかる。レベル5では、年初は230秒、年度末は90秒で156%時間が大幅に短縮されている。次に、最後にテストを終えた学生（図1-2）は、レベル1では、270秒から160秒で69%の短縮、レベル5では、440秒から220秒で100%の短縮という結果となった。

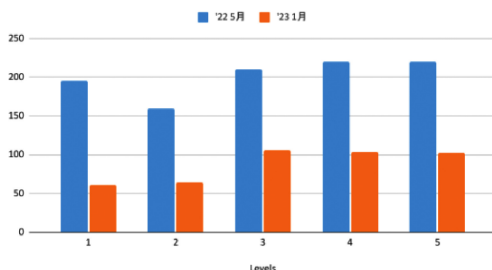


図2-1 2年生のテスト所要時間（最初の学生）

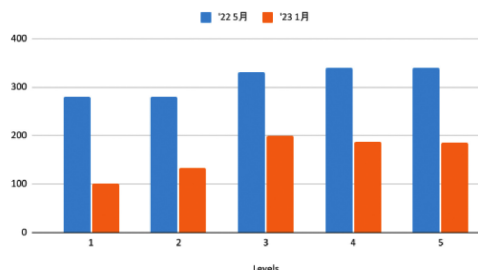


図2-2 2年生のテスト所要時間（最後の学生）

2年生のテスト所要時間の結果も同様に、最初にテストを終えた学生（図2-1）も最後に終えた学生（図2-2）も全てのレベルにおいて2倍ちかく、または3倍の速さで語彙を認識できるようになっていたことがわかる。すなわち、語彙を見たときの瞬時の判断、読解力や読み取る速度を含む総合的な語彙力の向上に効果があったと考えられる。

3.2 多読活動における動機づけ

3.2.1 目標設定

2章でも述べたように、学生の多読活動への取り組み方は、目標最低基準に到達することで単位を落とさないようにすればよいと考える受け身的な、いわゆる消極的な姿勢の学生もいれば、できるだけたくさんの獲得文字数を増やすことを目標に掲げ、自主的に読み進める積極的な取り組み姿勢で臨んでいる学生など様々である。ここで重要なのは、消極的な学生のやる気をいかに起こさせるかということである。そのためには、なぜ多読が必要なのかという客観的な説明、目的意識を明確にすることと合わせて、やる気を促す工夫が必要となる。

効果的な英語力向上のためには、継続的な多読活動が求められる。そこで、漠然とした学期目標最小基準値を1週間の数値に分けて表示することで、目の前の目標数値を視覚的に理解させることにした。つまり、12週間で2万語を読むためには、1週間で1,667語を読まなければならないということを示し、毎週の多読活動の課題を目に見える形で明示した。

3.2.2 学生への意識づけ

1学期目の学生による多読活動への取り組みを観察し、気付いたことは、クラス外活動の課題として学生任せにしておくと、ほとんどの学生は継続して自主的に取り組むことが難しいということだ。他教科を含めた全履修科目の中で、提出期限が近い課題に取り組むことが優先順位の上位となる。そのため、学期末最後の2週間で慌てて多読を進めて最小基準の目標数値を達成する学生もいた。

そこで、次の学期で取り組んだことは学生の活動に対する意識づけである。定期的に学生の読書状況を確認し、それを授業内で共有することで、学生一人一人に多読に対する関心を持たせ、それとともに個々の学生への声掛けなど、できる範囲で細やかなサポートを行うよう心掛けた。そうすることで、教員が一人一人の活動状況を見ていることを伝えるようにしたのである。

現在は、毎週の課題に1週間の最小達成目標値を加え、毎週目標達成確認を行うことで、学生に継続的な多読活動の意識づけを行っている。また授業内で多読活動を積極的に行っている学生の活動状況に触れることで、さらなる学生のやる気を促し、学生同士で自然と多読活動に

についての会話が生まれ、よい意味での競争意識も育む一助となっているようである。これについては、4章の学生の意識調査の結果からも見ていきたい。

3.2.3 やる気を起こさせる仕掛け

多読活動を活発にするための一つの仕掛けとして「XREADING CHALLENGE」というリーディングコンテストを開催し、さらなる学生への動機付けを行っている。これは、多読による獲得文字数により各賞が授与される仕組みで、一つ目に達成できる賞は25,000語以上である。また、リーディング力が低い学生にもチャレンジできるように、獲得文字数ではなく、読書冊数40冊以上で授与される賞も用意している。レベル1の本の場合は100字に満たないものもあるが、40冊読んで獲得文字数が4,000語でもその努力を称える賞があることで、全ての学生に受賞のチャンスを与えるようにしている。

これと並行して行われているのが、図書館との連携による多読活動のもう一つの仕掛け「英語多読マラソン」イベントである。図書館利用を促すことと多読活動を推進することを目的として、前期のイベント期間中にGRの本を借りてスタンプを集めるとスタンプの数により図書館から賞品が提供されるという企画である。基礎英語のクラスでは、「XREADING CHALLENGE」と合わせて「英語多読マラソン」も推進し、X-Readingの活動記録やスタンプカードのチェックを行うことで、学生への細やかな声掛けに繋げている。学生にとっても図書館に行くことや多読を進めることへの動機付けの一助となっている。

3.3 まとめと考察

レベル別語彙テストの分析結果から、学生のテストスコアは、各レベルにおいて年初から年度末まで1年を通して向上していることが見とれた。また、テスト所要時間についても、やはり各レベルにおいて、年度末には年初と比べて2倍近くから3倍の速さで語彙を認識できるようになっていることがわかった。さらに注目する点は、多読経験のない全学科の1年生に、より顕著な効果が見られることである。これらの考察から、多読活動が語彙力の向上に大きく関与している可能性が高いことが考えられる。

多読活動を進めるにあたり、学生に課題を与えるだけでは高い効果を生み出すことは困難であることがわかった。効率的に推進するためには、学生の動機付けが重要であり、学生一人一人が目標を持って自主的に多読活動を進めることが必要である。そのためには、教員が様々な仕掛けを工夫するとともに、学生の活動状況を把握することに努め、その上で、学生と密なコミュニケーションをとることも大切な要素であると考えられる。

4. 多読によるメンタル面での効果

学生の多読活動意欲を高めるためには、英語を読む楽しさや英語力が向上しているという実感を持たせることが重要である。本章では、リーディングに対するメンタル面の変化を見る質問調査を行い、多読活動に対する学生の意識について詳しく分析する。また、さらに明確なX-Reading 活用の有効性の可視化のため、学生個々の多読活動の記録を精査し、様々な視点からその相関関係を考察することで、効果的なシステムの構築に繋げる。

4.1 メンタル面の変化を見る質問調査

本研究を始めた2022年度前期半ばに、レベル別語彙テストのテストスコアだけではなく、リーディングに対する精神面の変化を検証することも重要であると考え、学期末に山下（2004）の読みに対する態度の質問（Reading Attitude）を基にした意識変化のアンケート調査を合わせて実施した。

調査対象は、「基礎英語」の履修者の中から筆者が担当した2022年度、2023年度の国際英語学科1年生、計34名である。これは、多読を始める前と始めた後の変化を検証することで、多読活動による英語教育への影響が如実に現れるであろうという観点から1年生のみを対象としたのである。また、調査は年2回各学期末に行い、前期1学期間（4-7月）と前後期合わせて1年間（4-1月）の意識変化調査を行った。調査内容は以下のとおりである。

- A. 心地よさ：読書時の気分に関する5項目
- B. 不安：読書時の不安感に関する5項目
- C. 知的価値：読書により得られる知識に関する6項目
- D. 現実的価値：読書により得られる現実的な価値に関する4項目
- E. 言語的価値：読書により得られる言語的な価値に関する5項目

上記アンケート調査の中で、今回の研究に直接関連すると考えられる「心地よさ」「不安」「言語的価値」の質問から抜粋した調査結果は以下のとおりである。質問に対する答えは、1. 悪化した 2. 少し悪化した 3. 変わらない 4. 少し好転した 5. 好転した で示す。

図3の質問「本（英文）を読むのは、楽しいか」については2022年度、2023年度、どちらも前期の多読活動を終えて70%以上の学生が好転したと感じると答えている。

図4の質問「本（英文）を読むと、語彙力を身につけることができるか」については2022年

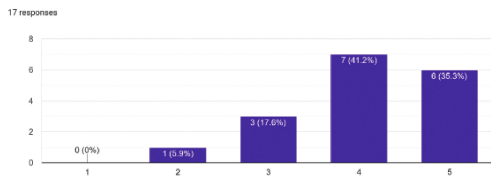


図3-1 2022年度4-7月意識調査：心地よさ
(英文の本を読むのは楽しいか)

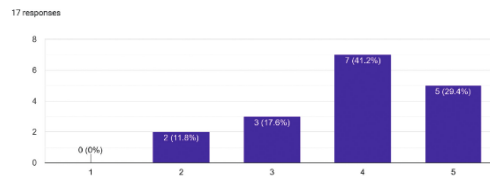


図3-2 2023年度4-7月意識調査：心地よさ
(英文の本を読むのは楽しいか)

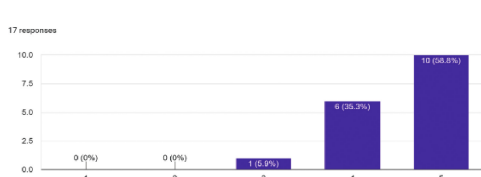


図4-1 2022年度4-7月意識調査：言語的価値
(語彙力を身につけることができるか)

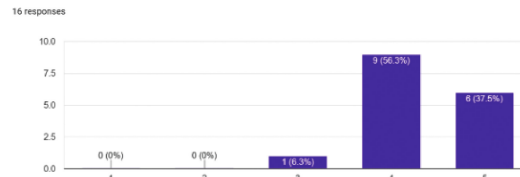


図4-2 2023年度4-7月意識調査：言語的価値
(語彙力を身につけることができるか)

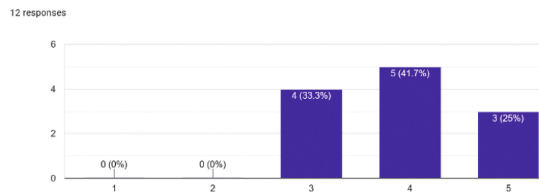


図5 1年間(4-1月)の意識変化：不安
(少しくらい内容がわからなくても気にしないか)

度が94.1%，2023年度が93.8%の学生が好転したと感じると答えていることから，多くの学生がリーディング活動によって語彙力を身につけることができた実感していることがわかる。

次に，後期学期末に1年間多読活動を行った結果のリーディングに対する意識変化についての調査結果を検証する。2022年度の学生へのアンケート調査は1年間で振り返るものではなく，年度末時点での意識調査としたため，意識変化を表す調査には当てはまらなかった。そのため，2023年度の学生へのアンケート調査のみをここでは取り上げる。

図5の質問「本（英文）を読んでいて，少しくらい内容がわからなくても気にしないか」については66.7%の学生が好転したと感じると答えている。知らない単語があると一つ一つ辞書で調べるという学習形態をとってきた日本人学生にとってわからない部分があっても気にせず文脈から意味を想像して読み進めるというやり方は，慣れるまでに時間がかかるはずである。これが多読本来のリーディング方法であり，多読活動を9か月間続けてきた成果がこの数値であるといえる。すなわち，9ヶ月の多読活動の結果，一字一句理解しながら読む精読法から母

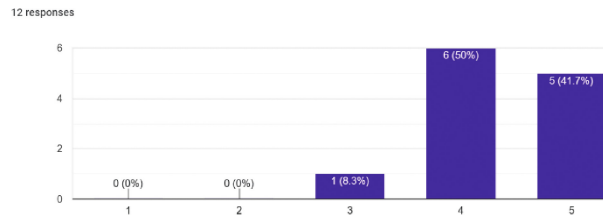


図6 1年間（4-1月）の意識変化：言語的価値
（読解力を高めることができるか）

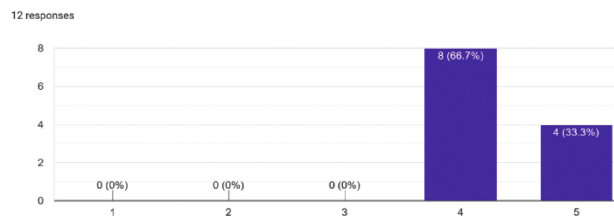


図7 1年間（4-1月）の意識変化：言語的価値
（知らない言い回しや表現に触れて自分の英語を豊かにできるか）

語話者のリーディング法とも言える話の前後関係、文脈から理解して読み進める多読法へと、学生個々のリーディングスキルが向上してきているということがわかる。つまり、リーディングスキルと合わせて、精神面においてもプラスの効果を実感しているということが見とれる。

図6の質問「本（英文）を読むと、読解力を高めることができるか」という質問についても91.7%の学生が好転したと感じると答えている。学生自身がリーディングの効果を理解し、語彙力ならびに読解力の向上を実感することは、学習に対する動機づけに大きく寄与するはずである。

図7の質問「本（英文）を読むと、知らない言い回しや表現に触れて自分の英語を豊かにできるか」については100%の学生が好転したと感じると答えている。全ての学生が英語力を豊かにするためにリーディングの効果が高いと実感していることは注目すべき点であり、教員のさらなる工夫により、より良い多読活動を学生に供与することで、学生の英語力を一層効果的に高めることができるだろう。

4.2 デジタルブックと紙媒体の本

大学生になり、初めてX-Readingを利用し、1年間多読活動に取り組んだ結果、図書館でGRの本を借りて読むこととオンラインで本を選んで読むことについて、実際に学生はどのように感じているのか、学生のデジタルライブラリーに対する評価が重要であると考え、学年末の質問調査にはデジタルブックに関する新たな質問項目を加えた。

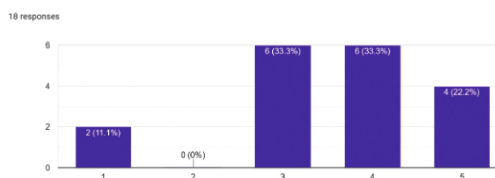


図8-1 2022年度末デジタルと紙媒体
(デジタルブックの方が好き)

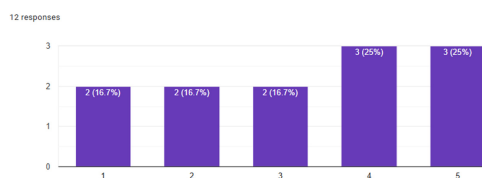


図8-2 2023年度末デジタルと紙媒体
(デジタルブックの方が好き)

図8の質問「多読学習においては紙媒体の本と比べて、デジタルブックの方が好きか」において、デジタルブックの方が好きだという学生は2022年度、2023年度ともに50～55%、紙媒体の本の方が好きだという学生は2022年度が11.1%、2023年度が33.4%という結果で、現代の若者の本離れが露呈した。各々の好みの理由については以下のとおりである。

1. デジタルブック

- ・スマホがあれば好きな時に好きな本が読める
- ・デジタルブックだと音声を聞きながら読むこともできる
- ・紙媒体よりスマートフォンの方が馴染みがある
- ・紙媒体よりスムーズに読むことができる
- ・読んでいた途中のページをすぐに開いてくれる

2. 紙媒体の本

- ・本の厚みを感じながら読むのが好きだ
- ・デジタルブックは目が痛くなったり、携帯電話のギガや充電を気にして集中できない

以上、質問調査や学生のコメントからもわかるように、今の学生はZ世代といわれるスマホ世代であるということがあらためて認識された。紙媒体が好きな学生は勿論存在するが、スマートフォンが生活の大きな一部となっている学生にとって、通学のバスや電車などや待ち時間でも手軽に読むことができ、本の返却などの必要もないデジタルブックの利便性が好まれる理由である。また、音声など様々な機能が付いていることも魅力となっている。

X-Readingの良い点としては、アクセスしやすいことが一番の理由であり、次に本の種類が豊富である、本が選びやすい、そして、自分の読書量や読書スピードがわかる、音声視聴が可能であると続く。

また2023年度の年度末に新たに加えた質問「多読活動のリーディング教材は、紙媒体の本だけでなく、デジタルブックもある方がよいか」については、75%の学生が「ある方がよい」と答えている。

4.3 モチベーション

学習効果を高めるために有効なのが、学習者の動機づけである。学生のレベル別語彙テストのスコアや多読活動の記録から得られる活動状況の詳細、リーディングに対する精神面の変化などを検証し、そこから考えられるより効果的な活動方法を探求しながら、様々な工夫を加えて多読活動を推進してきた。その中で、学生自身がそれをどのように感じているのかを知ること、さらに効果を高める学生のための多読活動に繋がるのではないだろうか。

そこで、2023年度の年度末に新たに加えた質問が動機づけに関するものである。「多読活動において自分のモチベーションが上がる理由は何ですか」という質問に対する答えは以下のとおりであった（図9）。

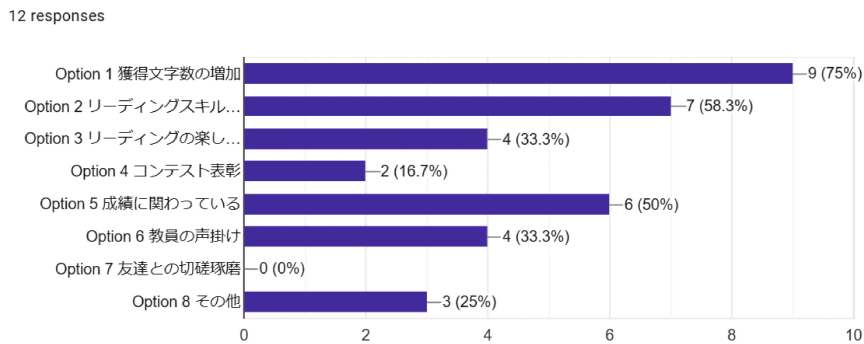


図9 2023年度末 多読活動におけるモチベーション（複数選択可）

獲得文字数の増加がモチベーションが上がる理由の一位で、リーディングスキルの向上を実感することがそれに続く。また教員の声掛けが33.3%という結果は特筆すべき要素だろう。やはり、教員が見ていること、そして一人一人の状況を把握してアドバイスなどの声掛けをすることは学生のモチベーションに大きく寄与しているのである。

その他の理由として挙げられていたのが、「デジタル化により、読書記録が数字化されて見える点で、長い目標を立てて学習に取り組むことができる」、「これだけ読めたんだという自信に繋げることができる」などである。読書獲得文字数、読書スピード、読書時間、読解テストによる読解力など、学生は自分の多読活動記録の詳細をいつでも確認することが可能であり、自己の英語力を分析することや自己の英語力の向上を客観的に捉えることもできる。デジタルブックに付随する機能が、学生に新たな動機づけの要素を加えていることがわかる。

4.4 考察とまとめ

多読活動が学生のリーディングに対する不安感の低下、心地よさ、英語力の向上を実感する

言語的価値観に大きく関与しており、それが英語学習への動機づけを大いに高めていることが明らかになった。また、学生の多読活動にデジタルブックを活用することは、スマホ世代の学生にとって、利便性が高く、尚且つ様々な機能により、リーディングスキルや読書状況を一目で確認することができ、自己分析も可能である。質問調査を通して、学生もデジタルブックの有用性を理解するとともに、多読の効果にも気づくことができたのではないだろうか。

5. 効果的な多読法に必要な授業方策

より効果的な多読活動を行うために、常に研究課程において、学生の多読状況や成果を検証、考察し、改善点を見つけ、新たな工夫を加えるという探求サイクルの継続を行ってきた。その他の改善点は以下のとおりである。

まず、2年目は多読活動を始めるにあたり、説明場所を教室から図書館に移動し、学生がスムーズに多読活動を始められるように実体験を取り入れた。各自、自分のスマートフォンでデジタルブック多読活動方法を確認した後、続いて図書館の Graded Book コーナーで本を選び、紙媒体の本での多読体験を行った。これにより、多読活動を授業内で始めることができ、学生の活動への自信とやる気を引き出すことにも繋がったのではないかと考える。

また、探求サイクルの継続においては、X-Reading を活用することで、学生個々の多読活動記録を定期的に精査することが可能になり、多読の頻度、時間、リーディングスピード、読書量など様々な視点から多読活動状況を把握することができた。それを基に、効率的な学生の多読活動のための強化ポイントを掲げ、対策を立てる手立てとした。また、質問調査に、多読活動においてデジタルライブラリーと学校図書館利用に対する学生の意見調査を加えることで、より効果的な多読活動の推進方法の模索も試みた。学生との対話から見とれる必要な改善点も加え、これらを探求サイクルに取り入れることで、多読活動の効果向上を継続的に行ってきた。

3年目となる今年度は、昨年度の質問調査結果を踏まえ、学生に図書館と X-Reading によるデジタルライブラリーでの多読活動をバランスよく行うことも推進している。大学生にとってレポートや論文執筆には図書館利用は欠かせないため、各々の利点を理解した上で上手に多読活動を行っていくことを学生に求める工夫が必要である。大学図書館と「基礎英語」科目による協働イベントのスタンプラリーなど学生のやる気を起こさせるような仕掛けも加えられたことにより、図書館とデジタルライブラリーの両方をバランスよく利用することの意識づけも行っている。効果的な英語力向上のためには、継続的な多読活動が求められ、指導者側も学生の様子や活動状況を考慮した工夫や方策を継続して取り入れていくことで、より良い多読活動を進めていくことが求められる。

6. まとめと今後の課題

門田修平他（2021）も述べているように、多読による効果はまず読書スピードの向上が挙げられる。これは、基本的な単語や平易な構文に遭遇する頻度が高く、それらを自動的に認識できるようになり、意味理解が素早くできるようになるからである。それに伴って語彙力も向上する。また、多読初期に読む本は、語彙や英文が平易で理解可能な短文が多いため、日本語の語順に合わせた返り読みや日本語訳をする癖が取れ、英語のまま内容理解をすることで、読む速度が上がる。多読で継続的に大量の英文を読むことで、文法力も含めた総合的な英語力の向上にも繋がっていく。

今回の研究において、定期的に学生の多読活動記録を確認しながら、多読活動の推進を行ってきた。個々の読書頻度に見られる継続性、獲得文字数による読書量、GRのレベル、リーディングスピードの変化など様々な観点からもその相関関係を考察してきたが、まだ詳しい分析、検証までには至っていない。

今後の課題は、学生一人一人の多読活動記録の様々な観点から、今回の研究調査結果を踏まえて、さらに分析と考察を進め、そこにある相関関係を明らかにし、デジタルライブラリーを活用した多読活動における語彙力、そして英語力向上への有効性を詳しく探っていきたい。

また、研究を進める中で見えてきたより良い多読活動の指導法を取り入れることで、学生の意識や学修成果にどのような変化が生まれているのかを、今後は注視し、図書館の本とX-Readingによるデジタルブックをバランスよく取り入れた多読活動に繋げていけるように、さらに有効なシステム構築を目指したい。

参 考 文 献

- 門田修平・高瀬敦子・川崎真理子（2021）「英語リーディングの認知科学—文字学習と多読の効果をさぐる—」くろしお出版
- 川崎睦（2017）「多読に関する理解と態度についての考察—全学共通教育プログラムにおける多読指導の位置付け—」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』3 pp. 92-104
- 国際多読教育学会による多読指導ガイド（2011）https://erfoundation.org/guide/ERF_GuideJ.pdf（2023年10月21日閲覧）
- 高瀬敦子（2010）『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店
- 山下淳子（2004）「英語と日本語の読解における読書週間と情意的傾向：多読指導に向けての基礎的研究」『日本学術振興科学研究費報告書（基盤研究 a2）』
- 吉田弘子（2015）「英語再履修クラスにおける多読指導の成果」『大阪経大論集』65（5） pp. 45-57
- Day, R. R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign*

Language, 14, pp. 136–141.

Frank Moates Elementary School. https://moateses.desotoisd.org/library/reading_resources/five_finger_rule (2023/10/21)

McLean, S., & Kramer, B. (2015). *The New Vocabulary Levels Test (Bilingual Japanese)*. Retrieved April 18, 2022, from Victoria University of Wellington, School of Linguistics and Applied Language Studies MReader. Retrieved on November 5, 2019 from <https://mreader.org/> (2023/10/21)

Nation, P. (1993). Measuring readiness for simplified material: a test of the first 1,000 words of English. In M.L.Tickoo (ed.), *Simplification: Theory and Application. Anthology Series*, 31, pp. 193–203.

Rutson-Griffiths, A., & Rutson-Griffiths, Y. (2018). The Relationship between Extensive Reading and TOEIC Score Gains. 広島文教女子大学高等教育研究 4, pp. 41–50.

Scholastic (2024). *The Five Finger Rule for Reading Will Help Your Child Find a 'Just-Right' book*. <https://www.scholastic.com/parents/books-and-reading/raise-a-reader-blog/five-finger-rule.html> (2023/10/21)

The Extensive Reading Foundation (2013). <https://erfoundation.org/wordpress/graded-readers/mreader/> (2023/10/21)